

全学共通カリキュラム運営センター歴代部長座談会

寺崎 昌男（本学学院調査役 初代部長）

所 一彦（本学名誉教授 第2代部長）

庄司 洋子（本学社会学部教授 第3代部長）

山本 博聖（本学理学部教授 現（第4代）部長）

司会：青木 康（本学文学部教授）

【全カリ10周年】

○青木 では、よろしくお願ひします。全カリ10周年ということで、いまから歴代の4人の運営センター部長を囲んで、座談会をさせていただきたいと思ひます。司会はこれまでいろいろと全カリに縁があったということで、青木が務めさせていただきます。

お手元に今日お話いただく素材になると思われる事項を載せた年表（40～41ページ参照）を用意しました。そこにあるように、ここ10年間、実際はもう少し長い期間、全カリにかかわる歴史が流れていると思うのですが、その大きなことがらだけ、少し最初に私がまとめてご紹介させていただいて、その上で歴代の部長からいろいろなお話をうかがうという形をとりたいと思ひます。

それで、全カリ10周年というのは、実はこの座談会が活字になって、皆さんの目に触れるのがおそらく2007年の春ということで、それが、現在の全学共通カリキュラムのもとになる新しい教養教育のカリキュラムが全面的に展開された1997年4月からちょうど10年にあたるということなわけです。

全カリ10周年と銘打ってこの座談会を開かせていただいているのですが、実際はその前の前史というものを私たちがむしろ大切にしたい。これは歴代部長

も同じお気持ちではないかと思うのですが、やはり、立教の全カリというのは、その前の一般教育部の長い教養教育に関する取組みを大切に、出発しているということが非常に大事ではないでしょうか。年表を見ると一般教育部の設置は1955年ということですから、40年間の歴史がそこにあつて、その上で全カリがあると言えます。

では、そういう一般教育部の伝統があったなかで、なぜ全カリが出てきたか。これはいろいろな説明の仕方があるかと思うのですが、ひとつは、やや私の独断的なところもあるかもしれないのですが、学士課程教育というような言い方がだんだん出てきて、1年生に入ってきた学生を4年間トータルに育てて卒業させていくというような視点が、だんだん強くなってきたことが考えられます。一般教育部が責任をもって最初の2年間のいわゆる教養教育を行い、3年生、4年生は専門学部の専門教育だという方式は、それはそれでメリットがあるのだけれども、やはり、4年間をトータルにと言ったときに、所属学部が責任をもって1年生から4年生を見るのだという考え方になり、一般教育部による教養教育から全カリへという変化につながったということが基本にあつただろうと思ひています。全カリ以前の話になりますが、専門学部がさまざまな教育的な

試みのなかで自学部の1年生、2年生にはこういうことをやらせてみたいと思っても、どうしても部が異なるということで、うまくいかないという経験をしてきたと。それをどう乗り越えるのかということで、全カリが始まったのだと解釈しています。

では、どういうふうに変えていくのがいいかということになったときに、この点は非常に大切な点ですが、実は5年間くらいかけて準備をしている。その上で、1997年度から新しい全カリが全面的に展開されているのです。その準備の過程で一番言われたのは、学生の視点をどうやってカリキュラムのなかに生かすかということだと思えます。あとでカリキュラムの新しい工夫といった話題に触れるところでも、それが学生にとってどうかという議論が当然出てくると思うのですが、やはり、学生の視点を非常に大切にするとということのひとつのキャッチフレーズにして、全カリというものを作っていったということは強調しておきたい。

カリキュラムとしての全カリが本格的に展開したのは1997年ですが、実は、運営組織としての全学共通カリキュラム運営センターは1994年の12月にできていました。実際のカリキュラムが実施される2年4カ月前に、そのカリキュラムを運営するための組織ができて、本格的な準備に入ったのです。しかも、その運営センターの開設前に、全カリの大枠はこういうふうにするのだというようなプラン



青木 康

作りは、さらに

2年以上かけてやってきていました。この全カリの非常に手厚い作り方は、前史のひとつで片付けてしまっただけではないぐらい大きなものがあるだろうと思っています。そういう準備過程を経て、1997年に満を持して新しい教養教育が始まりました。それがいまから10年前ということになります。

1997年の全カリの展開後で年表にあるのは、まず、1998年に新座キャンパス（当時の名称は武蔵野新座キャンパス）に2つの新学部、観光学部とコミュニティ福祉学部が誕生したことです。全カリは基本的には全学、各学部がともに支え合うというものですから、原理的に言えば学部の数がいくつになろうが、そのこと自体、本質には影響がないとは言えます。しかし、これで本格的に2つのキャンパスそれぞれに学部があるという状態になりました。そのことは、現実の全カリの運営ということを考えてときには、やはり大きな意味をもってくる問題だろうと思っています。全カリの運営が難しくなるといったことも含め、新座キャンパスでの新学部開設は、全カリにとって、やはりひとつの節目と言えるかなと思います。

次に、1997年に全面的に新しい全カリを展開してから4年後、2001年4月に、全カリのなかの2つの大きな区分け、言語と総合のうち、総合の部分について、かなり大きな改革が行われました。これも、準備に時間をかける全カリらしく、実際には1999年度ぐらいからかなり本格的に議論をしていったと思います。それで、2001年度に新しい総合のカリキュラムが始まりました。後ほど話題になるかもしれませんが、例えば、立教科目というような、新しい科目のグループができたということですね。

さらに、2006年度、今年度ですが、2回目のやや大きなカリキュラム改革がありました。どう呼んだらよいか分から

ないので、2006年度カリキュラムと申し
ておきます。2001年度と異なり、2006
年度カリキュラムの場合は、新しい学部
が2つ本学に誕生するという全学的に
見ても大きな教学改革に合わせる形で、
全カリの改革も進んだということかと
思います。

さて、10年間をざっと振り返ってみる
と、そんなことだったと思います。カリ
キュラムの全面展開のところまでは初
代の部長である寺崎先生にずっとリー
ドしていただいて、現実には始めてみて、
いろいろな問題がある、特に新座で新し
く科目を展開しなくてはならないとい
うようなところは、2代目の所先生にカ
バーしていただいた。1997年に新しいカ
リキュラムが始まって4年経つと、卒業
生が出る。だいたいそのころをめぐり、
第1回目の本格的な見直しということ
で、2001年の改革をやる。準備の最初
のところは所先生にリードしていただい
て、そのあとを第3代部長の庄司先生が
受けて、現実の改革が実施されたとい
う流れかと思うのですが、全カリの年表
として見たときに、これもやはりそれな
りに大きな節目と言えるのではないだ
ろうかと思える事柄があったら、4人の
部長の方から出していただき、それは
そういうこともあったねというように
確認してみたいと思うのですが、どう
でしょうか。

○山本 全カリの年表での寺崎先生
のところを書いてある『大学教育研究
フォーラム』のともかく発刊というのが、
僕はすごく大きいと思うのです。カリ
キュラム、運営組織と並ぶ全カリの3
つの柱の3つ目、教育改革の運動体
であるということを発信するのだとい
うわけです。そういうことを最初から
きっちり、位置付けている。これが非
常に大きいのではないかと僕は思っ
ています。これはすごい皆さんのエネ
ルギーが詰まって、最初からとにか
くスタートしていたから、

今までずっと続いていて、それは大
きいなど僕自身は今すごく感じてい
ます。

○寺崎 全カリからの発信として
もう一つ、『ニューズレター』の発
刊も大きいですね。ものすごく忙し
いときに、その2つをともかく出す
って、出しちゃったでしょう。

○所 あれはいつからですか。

○寺崎 1995年の7月ぐらいだ
ったかな。

○青木 正確に覚えていらっし
やる。1995年の7月ですもんね。

○寺崎 大変だったのです。

○青木 それから、こちらの雑
誌の形をした『フォーラム』のほう
は1996年の春ですから、いずれに
しても、その年度中。先ほどちょっ
と触れたのですが、運営センターは
1994年の12月にできているので
すが、1995年度が本格的な活動の
最初の年度ということになる。その
年の夏にも『ニューズレター』が
出て、そして、その年度末にこの
『大学教育研究フォーラム』が出
ている。しかも、その第1号の特集
タイトルというのが「大学教育改
革」だ。まさに全カリには、一般
教育というように狭い意味のことを
考えるのではなくて、大学教育改
革というもの、それをわれわれは
やるよといった熱意があった、
それがタイトルにも表れていま
すね。

【学部委員の役割】

○寺崎 この誌名を何にするか
で、法学部からの運営委員だった
栗原彬先生と、理学部の運営委員
で三木瑛一先生、このお二人が
創刊時の担当だったのですよ。お
二人が『大学教育研究年報』とか、
『全カリセンター紀要』とかにし
ようかなと思うのですけれども、
僕はその前に物好きな人が調べた
調査結果を知っていました。「紀要」
とか「年報」とかを出すと1本あた
りの読者

数が 1.02 人ですってね。その 1 は書いた本人だって。それを聞いていたから、やめませんかと言った。「フォーラム」がいいのではないかって話にもかくなかった。で、『大学教育研究フォーラム』にして、「研究」は入れましょうと。いいですねって、今の誌名になっちゃった。

大きさ、判型 (B5 版) は決まっていたけど、表紙は決まってない。ところができあがってきたら、ものすごくいいじゃないですか。「どこからこれを採ったのですか」って、栗原先生に聞いたら、ちょうど机の上にコロンビアだったか、MIT だかから送られてきた年報があったのですって。それがよかったです。採っちゃった。それが起こりですよ。

○青木 ああ、すみません。そういう意味では、あとでする予定の運営組織の話に踏み込んだらみたいなのですが、やはり、各学部から出ている運営委員というのが、各学部のある意味では利害代表としての部分は当然あるのだけれども、同時に全カリという組織の、一種の内閣を構成して、それぞれが担当部局を持った大臣みたいに働く仕組みができたことが重要だと思います。こういうアイデアはたぶん寺崎先生の頭のなかにあったのだと。比較的早い段階で、ぜひそういう形で分担をお願いしようと寺崎先生がおっしゃって、それで。

○庄司 私は準備委員会の段階から何だか本当に訳も分からずかかわったのですよ。

○寺崎 先生も初代の運営委員だったんですよ。

○庄司 というのは私 1990 年に立教大学に着任しているんで、新米教員ですよ。ちょうどこの年表の始まるあたり、まさに全カリの申し子のように立教に来ちゃったという感じで。何が何だか分からないにもかかわらず、ここに出るようになってみたら、ものすごいわけです

よ。毎回会議といったら夜の 10 時でも 11 時でも誰も微動だにせず、わあわあ。本当にわあわあという感じなのです。黒板に次々書いて、これっていったい何なのだろうって。

だから、今、改革、改革と言うけれども、あれが改革でなくて何であろうというぐらいの熱でした。私はすごい大学に来ちゃったなって、あのとき思いましたものね。何だ、これはって。あのころ全国的に見たら、いわゆる一般教育の先生方というのは、失礼ながら眠ったような状況にあったと思うのです。でも、そういう人たちが、ここではがんがん。それに対して、学部の先生方もがんがん。もう私は本当にびっくりしていたのです。そういう意味では、掛け声だけ改革って言っていたとか、看板をそういうふうに掲げたというのではなくて、ものすごく内実のあるものだったと思います。この準備段階は。

○所 こんなエネルギーはどこから来たのですか。

○庄司 本当にそうですよね。

○山本 そういう仕掛けは寺崎先生が考えられたのですか。

○寺崎 いやいや、とんでもない。発足してからは考えましたけれども。全カリというのは、その前からまことに知恵に満ちた組織だったというか、すごいからくりですよ。

○庄司 それね、誰が考えたの。

○所 塚田理先生 (総長 1994 年～1998 年) はどこから、そこにかかわっておられたのですか。

○青木 塚田先生は文学部長としてです。もともと 1991 年にいわゆる大綱化の話が出ますでしょう。あの前後のころから一般教育部のなかで、1990 年代の新しい状況下にどういうふうに教養教育をしていくのかを考えないといけないという流れがあったのですよ。それで、一般教育のあり方を変えることを考え

ていこうということを、おそらく一般教育部から部長会に問題提起して、実はそれは大綱化以前なのでよね。もちろん大綱化が、ああいう形で出るということは、情報としては当然入っていたと思いますけど。

そのあと、公式に、大綱化、要するに文科省からの動きが出てきて、それと結び付いて、では、どういうふうに変えていくかというふう組織が作られた。2度にわたって、審議会みたいなものが設けられて、それで、全カリの大枠ができて、そして、そのあと今度は運営センター準備委員会ができて、やっとその次に運営センターって。だから、さっき庄司先生が言われたみたいに、準備の段階にものすごく力を入れているんですね。

○庄司 要するに、あれがすごいと思ったのは誰がリーダーとか、そういう感じじゃないの。もう、みんなリーダーみたいな感じでね、大変な、組織とは言えないような、すごい状態だったのですよ。

○青木 そうですね、塚田先生も 1994年に総長になられますけれども、その前は文学部長として、この改革の問題にかかわっていらして、かなり熱心でいらしたのですが、その一方でやはり社会科学系の各学部の先生方が、教養教育と自分のところの専門教育とをどうつないでいくかということについて、かなり真剣に考えられていた部分が大きかっただろうと感じます。

○寺崎 それにしても教育研究室をベースにおいて、その次に構想小委員会があって運営委員会でしょう。私もさらに数カ月経たないと理解できませんでしたね。

○庄司 あの組織は誰の発明なのですか。私は寺崎先生が相当かんでおられるかと思ったけれども。

○青木 あれはたぶん寺崎先生の発明ではない。

○寺崎 とんでもない、とんでもない。

○庄司 そうですか。もっと前の、前のところですね。

○青木 むしろ部長会のなかでものごとく議論していた。私はかかわっていなかった時期ですけども。

○寺崎 私は青木さんだと思っていましたがね。

○青木 いや、いや。新しくできてくる組織のあり方ということについて、多分部長会で一番頑張られたのは当時の全学カリキュラム検討委員会委員長の淡路先生と聞いています。

○寺崎 淡路先生。なるほど。あれは本当に知恵者がつくられたシステムですよ。

○庄司 そうですよ。だけど、あれが分かるのにすごい時間がかかるのですよね。勉強をずっとしていかないと分からない。

○寺崎 慣れるのに本当に時間がかかった。しかし所先生の言葉を借りると、永久革命が可能なシステムになっちゃっているのですよね。

[教養教育と一般教育部]

○青木 すみません、全カリの教育の方へ少し話を移したいと思います。一般教育の課題と全カリ改革ということですけど、まず、何をするのかという目標ですね。それで、全カリでは「専門性に立つ教養人の育成」という表現というか目標を掲げました。

従来、大学教育、例えば 1990年代の初めぐらいまでというのは、やはり、大学というのは専門教育が大切ですよ。専門人を作るのだけれども、やはりそれには教養がなくてはということで、「教養ある専門人」というような表現があった。それがこの表現に変わった。この全カリが大切にできて、今や立教大学全体としても、大学教育とはこういうものだという議論をするときに使われる「専門性

に立つ教養人の育成」という表現は、私の記憶では寺崎先生が最初に言われたのだと思うのですが、寺崎先生からそのあたりのことをお話ください。

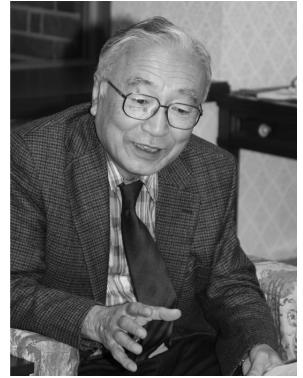
○寺崎 1992年10月に立教に移ってきて、1年ちょっとたったところで全カリの準備委員会に入って、運営センターができて、部長だということで、とにかく無理やり座らされたわけです。そのとき、どんな組織ができるにしても、専門学部の先生方が協力されないのではないかというのが僕は一番怖かったですね。ところが、現実には、非常に優れたメカニズムがあるので、専門学部からは、先ほども話していたようにチャンピオンが委員として出てこられることになった。そしてその会議がまことに中身濃く出発するという事になったのです。

全カリはあらゆる学部が協力しなければ絶対成り立たないカリキュラムプランなのだけれど、それに向けてなんとか先生方を説得するにはどうしたらよいか、とつおいつ考えていました。そこではっとひらめいたのがあの表現なのです。

というのは、戦後大学教育史を僕はこれまで勉強してきて、いろいろな団体やグループの意見を聞いたりしていました。これまでの通念はたしかに「教養ある専門人」をつくる、ということだった。しかし、これからは大きく変わらなくちゃいけないという気持ちがどこかにあったのです。それを専門学部の先生方にわかるような形で、明確に言う言い方はないかなと思っていたときの産物でした。それでも、僕のコピーにしてはえらく長生きしていて、とてもうれしいのです。

一方で、僕の当時の心理的な事実から言うと、やはり解散が予定されている一般教育部の先生方のメンタリティーのほうが重かったのです。学部への分属が次に来るでしょう。まず3分野の先生方

の分属があって、その次に保健体育と外国語の先生方、こちらの分属が次に来るであろう。一般教育部という組織はその前に解散する。その先生方は旧一般教



寺崎 昌男

育課程を持っていらっしゃる。その責任も、一般教育部が大学教育研究部に変わったところで、全カリに移りました。つまり、こわしながら当分は協力をお願いしなくちゃならないのです。

○山本 1995年のころですか。

○寺崎 1995年ですね。1995年3月に一般教育部の解散声明が出されて4月から変わったでしょう。あの変化のときに、一般教育部長はいらっしゃらなくなったので、結局、旧来の一般教育の試験の監督等の責任は、全部全カリ部長のところに来たわけですよ。だから、新しいのも考えていけなくちゃいけないし、旧課程の分の責任も相当負わなくちゃいけないというなかで、やっと、いろいろ分かってきましたね。やはり、大学がひとつの組織を解散するというのは大変なことで、しかもその解散の渦中にいらっしゃる先生方というのは、非常に大変なのだと思いました。立教の学内のことではなくて、他大学のこと、悪いうわさもいっぱい聞いたのです。

当時、大綱化以降は、あっちこっちの大学で教養部が解散していますからね。そうすると、起きてくる事柄は2つあって、ひとつは国立大学ですけれども、分属された先生たちが一切一般教育の方には出てこない。全員が持つのだ、全学

出動態勢だなんて口では言っているけれども、いったん巢穴に入った先生方はもう出てこない。立教でもそれが起きるのではないかとまず想像しましたね。

2番目はもっと激しい分かれ方をした私立大学があるのですけれども、そこは一般体育や外国語の先生を含めて、全員一般教育への出講をはっきり拒否している。そもそも教養部の解散のしかたに問題があったのですね。解散のしかたに問題があるときには、そういうふうになってくる。そういう事態に陥ることすら、僕は一時期感じましたね。けれども、それらは、当時の立教では杞憂でした。

やがて大学教育研究部の部長の朝比奈誼先生がちゃんと全カリ運営センターの運営委員会に参加されました。そこでいろいろな説明をされるのは、非常に私にとっては有益でしたしね、皆さんにとってもそうだったと思う。

そういうなかで出発しましたので、この「専門性に立つ教養人の育成」というスローガンは、当初は専門向けに、学部向けに出したのです。ところが、それが非常に抵抗がなかった。これまた不思議でした。

○青木 正直言って、僕もそういうことを言うと専門学部の先生方に失礼な言い方だけれども、怒るかなと思っていたけど、非常にすんなりときましたね、あれは。

○寺崎 結局は、先ほどおっしゃったように、学士課程教育をまとめてどう考えるかという、その下地があったのですね、立教のなかに。非常にそれがよかったと思いますね。

○青木 この全カリを説明する理念的な外皮は、全カリの準備過程としては比較的終わりの段階に近いところ、たぶん1996年度の終わりの頃になって出たように思うのですが。

○寺崎 言ったときですか。

○青木 ええ。

○寺崎 言い出したのは覚えています。1995年4月の運営委員会でした。

○青木 あれ、1995年度最初の運営委員会でしたっけ。

○寺崎 ええ、全カリが正規に発足して最初に言いました。1995年4月です。

○青木 全カリの準備って、かなりその前からやっていたので、勘違いしてしまいました。

全カリの基本的なプラン、例えば、異文化理解みたいな側面が大事だというようなこととかは前から言っていて、1995年ぐらいからはやや細かい議論を盛んにしたんですよ。けれども、各言語がきちんと、変な言い方ですが、個々の先生方の個人芸に依存しないというのですかね、言語として統一したプランを持ち、それに基づいて教育をするのだといった論点は、随分早い段階から出ていたような気がします。そういったやり方のある意味では集大成として、全体として4年間で教養人を作っていくのだと、こういうことなのかなと感じました。

○寺崎 繰り返しになるところがありますが、補足的に付け加えると、1995年4月をどうして正規の発足と言うかということ、一般教育部の解散がその前にあったからですね。その後継組織で、保健体育と外国語の先生方が属した大学教育研究部で部長が選出されて、その部長が全カリ運営センターの運営委員会に参加されることになった。これがちょうど4月の運営委員会です。ですから、本当に制度的な意味での「全カリ運営センター」の発足というのは1995年4月というのが正しいでしょうね。

○青木 全カリ運営センターが教養教育に責任をもつという意味では、1995年がスタートですね。

○庄司 でもあのとき私は運営委員でしたけれども、寺崎先生のご苦労は想像に余りあると、そう思いましたよ。先生が本当にどれだけお辞儀をしておられ

たことか。ここはひとつ曲げて、とかね。やっぱり本当に一所懸命説得しておられて、寺崎先生のお人柄で乗り切られたところが随分あったと思いますけれどもね。大変なことだと分かりました。

○寺崎 家で私はろくすっぽ夕食も食べれないのに、帰って食べれば、「全カリ全カリ」って言うでしょう。子どもたちはまだ小さかったから、食べたら騒いでいるのですけれども、妻が嫌みたっぷりに、「あなたたちお父さんは全カリでカリカリしているのだから、もう少し静かにしなさい」って。いろいろ言われましたよ。

○庄司 組織の特殊性がまだ誰も見たこともない、未曾有の世界だったのです。そこに踏み込んでいる。やはり私自身もそういう感じはありましたけれども、それを率いている先生のご苦労は計り知れないという感じが本当にしました。心底そう思う。

【言語のカリキュラム改革】

○青木 次に改革の中身の方に行ってみましょう。全カリとしては、基本的には学生にどういう教養教育のカリキュラムを提供するか、これがある意味ではアルファであってオメガなのだと思いますけれども。そのなかで、例えば言語教育について、専門学部、そして言語の先生方の間に、正直言ってかなり温度差があった。そういうなかで、新しい言語教育の考え方というものを出して、それに基づいてとにかく作っていくのだっていう、何て言ったらいいんですかね、計画性みたいなものが全カリには非常に強かったと思うのですけれども。

一般に専門学部が持っているカリキュラムというのは、伝統的な既存の学問体系みたいなものがあるので、ある程度それに慣れてやっていけるのだけれども、今回一般教育部という従来のやり方

を廃して、新しい教養教育を作るのだと言ったときに、非常に基本的な考え方というものがあって、それに基づけば、いいカリキュラムとはどんなカリキュラムなのか、そのためには具体的にもうちょっと細かいレベルではどんなことが必要かといったことについて、非常に議論を重ねましたね。それでさっきも、会議が長いとかいうようなことを言われたのですけれども。

例えば異文化理解とか、発信能力といったこともよく言われましたね。従来の言語教育というか、昔は外国語教育と言っていましたけれども、外国語教育というのが、どうしても、読むと、せいぜい聞くというようなことで、受ける方が中心だったのが、やはり発信できないといけない。外の人間とコミュニケーションできないのが問題で、コミュニケーションができるためには、今度は当然、異文化理解ということがなければならぬといったような議論のつながり方かなと思います。このあたりは、現部長の山本先生は、以前は言語部会長もなさっていて、言語教育の中身にもお詳しいのですけれども、全カリの特徴みたいなことって、10年を少し振り返ったらどんな感じですか。

○山本 私が全カリに運営委員として関与したのが1996年度でした。その年に全カリに何が起こったかというのは、今振り返るとすごいことが起こっていたのです。ひとことで言って、寺崎先生が『ニューズレター』に書かれている文章の最初のところ『1997年4月』などという時は本当に来るのだろうか、まさにこれが実感だったのです。全カリに入ったときは、自分自身は全カリというのは全く分からなくて、『フォーラム』の最後のあとがきにも、ちょっと書かせてもらったのですけれども、何か変なところに放り込まれたというのが実感でした。

そのときは、今言われたような言語教育の体系はだいたいできあがっていました。全カリの新しい言語体系があたりまえだと思って議論に参加していましたが、実は学生諸君と話をすると、どうやら何か違おうと。つまり、このクラスと隣のクラスでは先生によってこんなに温度差がある。つまり、満足度が全く違おうと学生は訴えていたのです。簡単に言えば、それをなくしましょうというのが、統一カリキュラムであり、統一シラバスで、そういうことがあたりまえのように議論されているところに僕は入っていったのです。ところが、まだ、横ではそうではないクラスが走っているわけですよ。だから、それにやはり一番びっくりしましたね。

新たな言語カリキュラムをきちんとやっていくためには何が必要なのかと考え、こういった大きな改革にもとづく新たな言語教育を運営していくために任期のついた先生方（現在の嘱託講師）を、とにかくネイティブだけではなくて、日本人の先生まで拡大してやりましょうという、そこがすごいなと思いました。しかも、専任も採るのだというので、言語教育に関しては素人である私が人事委員長を務めたりもしました。とにかく人事にかかるお金も熱意も、その当時としてはすごいと感心していました。

○寺崎 先生のところには、ペアティーチャー制度っていうのはもう当然に考えられていたでしょう。

○山本 考えられていました。僕が入って議論していたときは、ペアクラス、つまり同じ教員がひとつのクラスを週に2度教える方式ですが、ある言語ではそれができません。できないからこうやりますといった意見が戦わされ、それを認める認めないと議論がなされていました。

○寺崎 あの時期の議論のなかで話題になった順序から言うと、僕の記憶では

セメスター制、これが大問題だったのですね。でもそれは1年目（1995年度）に片付いたのですよ。私は今でも覚えていますよ。教務部の全職員の方を前にして、なぜセメスター制が大事かと演説をさせられたのですものね。それが1995年の夏でしたね、暑いとき。それでやっと通してもらった記憶があります。その次にワークショップがすでに始まったでしょう。

○青木 ちょっとそれに関連して、さっき触れた準備を手厚くやってきたということについて言うと、たぶん1995年度の後期ぐらいからパイロット・プログラムと言って、ごく一部の学部とか学科の言語の授業というのを、新しい全カリの考え方に基づくところなるという形で実施したのですね。1996年度はさらにそれを拡大したのですが、それでもやはり、全学のなかで言うと部分的に実施したのですよね。

○寺崎 そうでした。

○青木 それがやはりすごい力になりました。現実の説得力、さっき山本先生も言われたように、クラブとかで友だち同士で話していると、全然こっちのクラスとあっちのクラスとで違っていると、いった話があって、現実をもって語らしめるといふか、そういうような側面があったと思うのですね。

○寺崎 次の最後のハードルが嘱託講師制度だったと思いますね。

○青木 そうですね。あれにかけたエネルギーもすごかったと思うのですよね。結局、大学というのは確かにカリキュラムが大事だということがあって、それはすべての議論の前提で一所懸命、それこそ、1991年度以来ずっと議論をしてきたのだけれども、やはりそれをきちんと展開していくためには、例えば人の数の問題、それから、数だけではなくて、どういう人が科目を担当するかとか、やはり、そういうカリキュラムを支えるための

仕掛けというのがすごく大事だというので、全カリはやはりその問題にかなり踏み込んだし、踏み込まざるをえなかったし、またおそらく全学的に踏み込むことを許された。

そこはやはり非常に大きな力だったと思いますね。既存の枠組みがあって、今あるこの資源を使って、いいカリキュラムを工夫しなさいというのではなくて、先ほど言った出発点のところで、基本的に教育はどうあるべきかということを考えれば、こういうことをやるのだ、やるためにはこういうことは必要だと言うと、従来の大学の考え方ではなかったようなこともかなりやれた。

例えば、大学の、立教の授業というのは、通年でやるのがほとんどだったところへ、基本的に学期単位でやって、ある学期に落ちた学生に、すぐ次の学期に対応する、そういうことをしなければ、学生が伸びていかないという考え方を出した。だけど、教務にしてみれば、従来は年に1回、言ってみれば決算を締めていけばよかったのに、年に2回ずつ決算をしなさいということになる、これは大変なことだということで、セメスター制はぜひぶん議論になったのですね。

【コストの問題】

○庄司 全カリというのは、そういう大きいのも小さいのも含めて、発明に次ぐ発明という感じなのですよね。とにかく私は invention and innovation という感じで受け止めていましたよ。やはり、今まで大学のなかでは見たことも聞いたこともないというような制度とかが、どんどん開発されていきましたからね。全カリのなかには、とにかく発明品が多いという感じでした。

○所 今になってあれっと思っただけで、コストの問題はどう解決したのですか。つまり、今までより財政規模

は膨らむことになるでしょう。どっかを削っていったの。

○青木 例えば、少し難しい話になりますが、嘱託講師は有期制教員で、いわゆる専任教員より多くのコマを担当してもらいますが、そこでは、もともと言語教育の専門性に優れた方を採っている。だから、さっきの発明という話に戻すと、教員の採り方自体だって、従来大学が教員を採るといときは、むしろどんな論文を書いていますかとか、そういうことで採っていたのを、むしろそうではないと、全カリの人事では、これは専任教員人事も含めてだけれども、教育の能力を重視して選んでいる。

○庄司 それで、教育のコストパフォーマンスが上がっていましたよね。

○青木 特に嘱託講師の方の場合は、そういう言語教育に非常に専門的にかかわれるということを大切にしながら採った。で、その方々に多くの科目を持っていただいて、教育の総量を増やしながらかどうかは分かりませんが、要するにコストは膨らまさない形でやっている。

○所 かなり早い段階から人事にストップをかけて、その分をそういう新しい人材で埋めていく。それをやっているのですね。

○青木 そうですね。一般教育部は何年間か人事が止まっていたね。それは、大きな改革が迫っているということで。

○山本 6年ぐらい止まっていたのですか。

○青木 数年間止まっていたのじゃないですか。

○寺崎 3年でしたかね。こういうことは極めて大きな事実ですよ。

○所 これ誰が号令かけたの。

○青木 それはやはり、それで最初の話に戻るのだけれども、やはり 1990 年代前半というのは、全学で新しい教育を作

るのだという、かなり強い思いがあったのです。普通なかなか大学がある部局の人事にストップをかける、何て言うか、特定の人事はともかくとして、ゼネラルにストップをかけるというのは、ものすごく大変なことですよね。

○所 大変なことですよ。

○青木 そこには、当然ある部分から言えば批判されてもおかしくないような状況はありうるのだけれども、自分たちで非常に大きな改革を今やろうとしているのだから、要するにその方向性が見えるまで、とにかく止めるという決断をしていたわけですよ。

○庄司 そういう嘱託講師のようなコストパフォーマンスのよろしい制度を導入しながら、一方では、例えば総合B群科目みたいなぜいたくな制度を作ったり、そういうあたりもなかなか絶妙な仕掛けをしていますね。

○寺崎 でしょう。いや、なかなか絶妙な運営だったと思います。

どこの大学でも、大学改革に、特にカリキュラム改革には金がいらぬ、とみんな思うのですよ。先生たちがもうちょっと頑張って科目を持ってくれればいいと思うのですけどね。でも、やはりお金があると僕は気づかされましたね。第一、総合B、僕はあれには最後まで懐疑的でした。だいたい、続かないだろうと思った。非常勤コマを3つ付けるにしても、半年分、全学部から出るのだから、最低6プロジェクトは出さないといけないでしょう。6プロジェクトとはいえ、その時点では何もないわけですよ。とてもできないだろうと思っていたら、ぴしゃっとできましたよね。非常勤講師コマを3コマずつまで使えるという、あれは大英断ですよ。当時の総合部会長の野田嶺志先生も大変心配しておられました。

○所 あれ、今でも続いているのですか。

○山本 ええ、今でも続いています。

○青木 それは先生方がちゃんと守って定着させていただいている。

○寺崎 えらいですよ、あれは。

○青木 あれは実際もつと欲深で、なんとか5コマを付けようという話もあった。

○寺崎 ああ、そうだった。5コマね。

○青木 なんとか5コマをっていうのがあったし、それから、もうひとつはその5コマのうちの1コマは、むしろ前年度に使いたいという話もあった。正直言えば、僕は裏方さんとして、そのあたりは少し頑張っていたのですが。実際にコーディネートする人が大変なのは前年度なんですよ。だから、前年度に、来年度は総合Bをやる予定だということになったら、前年度の後期に1コマ使わせたいって。これの実現には頑張ったのですが、まだやってもいない科目に臨増コマを付けるという話は、さすがに通らなかつた。

○寺崎 臨増コマ3コマ、あれは良策でしたよ、本当に。あれでできたのですものね。あつという間に6つ総合Bのプロジェクトがそろったのだもの。あれはびっくりしました。

[スタッキングチェア、ワークショップ、etc]

○寺崎 もうひとつ、お金がなくちゃいけないと思ったのは、全カリ実施の直前に分かった言語クラスのためには従来の固定机ではだめっていう話ね。

○青木 スタッキングチェアね。

○寺崎 あれもびっくりしましたね。部長会に突然提案されました。職員の人が気付いてくれたのですね。「先生、だって、コミュニケーションコースなんて後を向いて話をするのですか」って言うわけですよ。5号館の上の方の教室は固定机でした。全部替えなくっちゃいけない。替えるって言ったって、ただ、釘を引き

抜いて、横に動かすのではだめでしょう。だから、一人用の個別チェアを使う。とにかく発注をかけて、4月までには入れないといけない。大変でしたよね。最後は運営委員会にもチェアの見本を持ってきて、みんなで座ってみました。

○青木 そうですね。僕、たぶん言語構想小委員会のときだったと思いますが、試験台になって座りました。なんとなくこれに消極的な方もいて、ひょっとして反対とかが出るのではないかという心配があって、いかにこのメモ台付きの椅子が使いやすいかっていうことを見せなくちゃというので、あれ、正直言って、コストのせいもあるのかもしれないのだけど、狭い場所にたくさん入れるので、座る部分がやや狭いのですよね。だから体格のいい委員にモデルになって座ってもらって、何か使いにくそうに見えるといけないというので、やせているから僕がパフォーマンスで座ってみせました。

○寺崎 言語構想でやったの。

○青木 運営委員会でもやったような気がするけど。

○寺崎 床も変えなきゃいかんでしよう。固定机をはずした穴があいているのですもの。全部張り替える。それから、見てみたら壁も悪いとか、黒板もだめとか、いろいろなことが分かってきて、結局、費用は総額億を超えたのじゃないかな。あれは1月に決まりました。

お金にからんだ件という点では最後が嘱託講師ですね。これはさっき山本先生がおっしゃったように、外国人も日本人も両方願うする。あれは革命的で、あの当時はほかになかったですよ。あの当時こういう契約教員の制度を入れたのは、近くでは東海大でしたね。それから、もうひとつは立命館。この2つが非常に有名でした。けれども両方ともネイティブだけなのです。日本人は入っていない。立教では日本人でも構わないっ

て言うのですよ。これは他所の大学の人の聞くと、びっくりしていましたね。

○山本 英語では立教の嘱託講師をステップにして、専任になっていくケースはけっこう多いのです。立教の英語カリキュラムの成果もあって、嘱託講師を日本人まで拡大したことは非常に良かったと思います。

○寺崎 心配することはなかったな。

○庄司 私はワークショップがね、本当にきちんとやられて、定期的にもものすごい数、開かれていたけど、いわゆる担当者連絡会という組織があったために、当時でいう非常勤、いま兼任と言っている、そういう方たちも巻き込んでやるっていうのは、他所ではあまり聞いたことないのですよね。そういう教員教育ってね、すごいなと思って。

○寺崎 あれは今で言えばFDですからね。兼任で来ておられる他所の大学の先生まで入れたFDってめったにないですよ。

○庄司 大変なことですよ。

○青木 ただ熱心にやっている。いまだって英語研は毎年やっていると思いますけれども。

○寺崎 1度、全カ리를代表してあいさつした記憶がある。

○山本 昨年度末の3月に自然科学研究室主催の担当者連絡会が実施され、私も自分の全カリでの授業について報告しました。もう少し多くやってほしいなというのが、本当のところですよ。

○青木 特に総合部会がね。

○山本 言語は担当者会もFDもけっこう定期的きちんやっています。

○青木 事実上合体して、今はやれているし。

○山本 総合の方が、やるところと、やらないところが今のところある。

○青木 自然研は実績を従来積み重ねてきているんじゃないですかね。私の印象だと、そうです。

[学生に対する説明]

○寺崎 もうひとついいですか。さっき学生の視点ということをおっしゃいましたけれども、それとの関連で、あのころ感心したのは職員の人たちです。最後に行くまでに学生への説明会をしましょう、と職員の人たちから言われた。途中まで私は、なるべくならこっそり作りたい、ぱっと実施した方がいいんじゃないかというように思っていました。ところが、説明会をしましょう、何が出てくるか分からないけれど、聞いてみましょう、と言うのですよ。当時全カリ事務室の課長だった西田邦昭さんが学生部の経験があったということも大きかったかもしれませんね。やってみると、あれも面白かったね。

○所 あれは文学部が、いわゆる 1969 年の流れで。

○青木 そうですね。文学部は 1969 年のときに大きな混乱を経験して、そのあとは文学部集会とあって、次年度のカリキュラムはこうなのだということを教員側が出すと。筋論として言えば、それで学生が抵抗しても説得する。教員が責任をもってカリキュラムを提示するわけだから。逆に学生に言い負かされたら白紙撤回する。そういう学生と教員が対峙（たいじ）するのだというのがひとつの文化で、今どこまで本当の意味でそれが守れているのかどうかは別の問題ですけれども、でも、制度的には続いてい



て、広報としても悪いことではもちろんないと思う。

全カリも大きな改革のときには、必ず今でも 11 月ぐらいには、やっぱり学生に説明会をやらなくちゃと、常にやっていますよね。一番最初のところは当然大きな変化だったわけで、それは大事なことです。

○寺崎 タッカーホールでやったのですが、学生が 100 人以上来ましたものね。

○青木 あの手のものとしてはよく来た。

○寺崎 現にいるのは 2 年生、1 年生だから、どんなにカリキュラムを変えたって彼らにはほとんど関係ないわけですよ。

○青木 相対的にはね。もちろん彼らもまだ若干は次年度にも科目をとるでしょうが、むしろ君たちには関係ないのだけど、それでも言いたいことあったら言ってほしいという形でしたね。

○寺崎 けっこう言いましたね、いろいろと。

○青木 全カリは、教養教育のカリキュラムの、やや細かいことで言っても具体的な中身を新しくしているし、もっと背景にある、根本的な考え方みたいなものをやはり相当新しくしている。実験的なものね。だから、あまり実験と言うと、逆に無責任じゃないかと言われちゃうところも、もちろんないわけではないのだけれども。かなり壮大な実験をしているというところはあるので。

○寺崎 そういうことですね。

○青木 ただ、そのときにこちらが独り善がりにならないためにも、やはり学生に説明するというこの意味合いというのは、非常に大きいですよ。どうしても改革っていうのは独り善がりになるから。

○寺崎 説明会にお出になった先生はおられます？ 庄司先生は出ておられた？

○庄司 出ていました。

○寺崎 出ておられたんですね。学生が、全カリ、特に英語改革にはもろ手を挙げてみんな賛成するかと思いきや、全然違って、「私たちは英会話学校に入ってきたのじゃありません」って言うんだものね。びっくりしたな。その次に大学に来てみたら、体育会の連中がビラをまいているのですよね。見たら、「全カリ反対」って書いてあるのですよ。ところが、その横に「体育会のクラブ活動を阻害する全カリ反対」って書いてあるのですよ。それで、ビラをもらって、「全カリ反対じゃないのだね。クラブ活動を阻害するから反対なのだね」って言ったら、「はい、そうです」って言う。

○青木 時間割の問題があるのですよね。従来、一般教育部の時代の教養科目ってというのは基本的に4限（当時は7・8時限と言っていた）までだったかにおさめていたのだけれども、全カリはいろいろな、ちょっと細かいことは忘れましたが、事情で、どうしても時間割を組んでいくと、5限を使わざるをえない。これに対して、クラブ活動の時間として、5限以降は基本的に全面的に空けてくれるという声が強くて、なかなか難しかった。それでも、最終的には5限までは本来の正規の授業時間でしょうということで、たぶんそうなっていると思いますけれども。

○寺崎 5限に必修科目を置かれたらたまらんと思っていたのですね。1年生の。

○青木 そういうのもありましたね。最初のときだったか。そうですね。

【総合の2001年度カリキュラム】

○青木 今日の座談会の大きな目次で言うと、ここまで一般教育の課題と全カリ改革ということでお話をされていて、運営組織のこともずっと話のなかで出て

いたかと思えますね。あと、カリキュラムのことでいくと、立教科目のこと、これはあとの特色 GP とか外部評価とかいうことにも絡んできます。立教科目と時事科目という2001年度に導入されたカリキュラムのところは、最初少し私からお話した方がいいでしょうか。

1997年に新しいカリキュラムが全面展開になった。で、全カリというのは常に先のことを考えている、少なくとも考えるべきだということが基本的底流としてありました。1997年は発足して、とにかく動きだすと。1998年は、さっきちょっと申しあげたように、新座に新学部が2つできて、そことの関係をどうするかという、かなりテクニカルには難しい問題があった。それで、3年目を迎える1999年度ぐらいから、これで満足してはいけなさと考え始めた。特に総合教育科目については、ざっくばらんに言って、旧来の一般教育部が展開していた教養科目、いわゆる一般教育科目との関係では、いろいろな工夫を1997年のところでしたけれども、まだ不十分だという意識が、教員サイドにはあった。なんとかしてもう少し新しい要素というのを入れたいということは常にあった。

それから、もうひとつは少し数の話になってしまうのだけれども、総合教育科目のなかには、総合A群という非常にたくさん科目が入っている部分がありますけれども、その科目群がまたいくつかのブロックに分かれている。全カリではカテゴリーというふうに呼んでいるわけです。ストレートに言うと、人気のあるカテゴリーとそうでないカテゴリーがあって、かなりカテゴリーごとに平均履修者数、1つの授業を何人がとっているかという数字の差が大きくなっていました。これは現実的に考えると、われわれはこの分野も大切だ、あの分野も大切だと言っているのに、あるカテゴリーのところは非常に込んでいて、どうし

でも大きな人数の授業になってしまい、他方はそうではないというので、やはりこれは困るということで、簡単に言えば、ならさないといけないという側面があった。

だから、要するに、少しコマの配分調整をしましょうと。人気のあるところには手厚くということです。しかし、正直言って全体のコマ数を増やすということはいろいろな条件を考えたときに難しいなかで、どういうふうにそれをやったらいいだろうかっていう、かなり難しい問題があった。それで2001年、ちょうど最初のカリキュラムが動きだして4年後ぐらいを目標に、総合のカリキュラム改革をやりましょうというふうになった。

で、履修の仕方とかいうようなところにも、もちろん手は付けたのだけれども、ひとつには、何よりも面白い授業が多くて、学生も積極的に取ってくれるといった状況のなかで、さっき言った数のアンバランスみたいなものも調整したいというようなことで考えたのが、ここに出てくる立教科目と時事科目です。これを作っていく過程に僕もかかわったのですけれども、ここは従来の考え方から相当踏み込んだ教養科目の考え方をしていこうと思うのですね。

つまり、従来、昔の私たちの世代が学んだような一般教育科目というのは、政治学とか物理学というふうで、いわゆる旧来の学問体系になっている。1997年から実施された全カリを作ったときに、それでは、もう今の学生の興味を惹きつけることもできないし、学生が自分でものを考えていく訓練にならないというので、例えば、社会なり自然なりをどういう切り口で見たらいいかというようなことで、新しい名前の科目を提供しているわけですね。例えば、「コミュニケーション」とか「市場と社会」とか、そういう科目の名前の付け方をした。しかし、

私の言葉ですけど、まだ人間、社会、あるいは自然の世界を比較的公平に切っている。あまり大学が踏み込んでこの問題は面白いよとか、この問題が今大切だから特に考えてみたらどうだみたいな、そういうふうには踏み込んでいないのですね。そこで、もう少し大学側が踏み込んで、科目というものを見せるという側面があった方がいいんじゃないかと。

さっき言ったコマ数の調整をする過程のなかで、一方で数の調整もするのだけれども、もうちょっと大学側が踏み込んで、いったいどういう科目を展開することができるよう育てていくのに役立つかといった観点から、意識的に科目を作り込んでいくというか、そういう観点で新しいジャンルの科目を作ってみることにしました。しかも、そのなかを2つのジャンルに分けた。時事科目というのは非常に日々刻々いろいろなことが起きてくる。それに対してビビッドに反応する。だから、全カリのなかでもせいぜい2年ぐらいしか続かないような形の科目。

一方で、立教科目というのは、立教大学としてはずっと基本的に大切にしているもので、ある程度長い期間にわたって、きちんと責任をもって展開する。俗な表現をすれば立教らしい科目というのでしょかね。そういうような科目を、あえてこちらから、この科目は特にそういう性格の科目ですよって見せるという、そういう考え方で作った。その相談の過程でも、実はいろいろなことがあって、例えば時事科目なんていうようなものについては、いま現実にあるものよりも、もっと踏み込んだ、少しある意味で遊びのあるような科目も実は構想したことがあった。ちょっと私だけが脱線して申し訳ないのですが、例えば、どこかのブランド企業が「来年のコンセプトはこれです」みたいなことを言ったら、

その企業とタイアップして、そのコン
セプトにかかわる講義をブランド協賛
科目として展開することができないか
とか、いろいろ荒唐無稽なことも考えた
のですね。そのうちのあまりにもくだら
ない部分は諦めて、今のような時事科目
になっているわけです。

でも、そういうことを何人かの教員が
けっこうまじめに、かなり長い時間をか
けて、特別委員会を作って話し合ってい
た。だけど、非常におもしろかったです
ね、参加していて。みんな、いろいろな
ことを言って、そういうのが大事かなあ
と思った。そして、山本先生の方に立
教科目は引き継いでいただいた。

○山本 　　というか、全体の思い出話にな
ってしまうのですが、大きな流れから
すると、2001年度にむけて総合A群科目
の専任担当ルールを決めてもらって、そ
れによって一応カリキュラムの運営は
安定的にできるようになった。しかも立
教科目等が走り出して、非常に全カリの
充実期というふうなイメージでとらえ
られるようになった。そのときに、ちょ
うど特色GPが始まりました。

【特色GP】

○山本 　　特色GPへの取組みに関して
は、全カリは立教としての誇りであり特
色だから、これは絶対に申請することが
決断された。これは自然の流れです。そ
して、全カリにかかわっている者とし
て一番大きかったのは、それが不採択だ
ったということですね。

○庄司 　　私の任期の一番終わりのと
ころで、あれは非常に大きかった。2003
年の第1回の特色GPで全カリが不採
択というのは。

○青木 　　不採択って、資料の年表に2回
出ている。

○庄司 　　すごいです。年表に不採
択までね。というのは、これは本当に、山本先

生もおっしゃるくらいに意味の大きい
ことだったのね。いま特色GPですけれ
ども、あのころにはCOLと言っていま
した。

○寺崎 　　2回目もだめで。

○山本 　　昨年度の『大学教育研究フォー
ラム』に、特色GPへの全カリのかかわ
り方というのをまとめて書きました。そ
うすると、その前年(2002年)から、い
わゆるCOEという、研究評価のプログ
ラムがスタートしている。ずっと立教は
教育に特色がありますと言っていて、教
育の方はどうなるのだろうかと思っ
ていたら、次の年に教育分野でも始ま
ったのです。その時はCOLと呼ばれていま
した。それに全カリが取り組む、とい
うのは当然の流れでした。

○庄司 　　あのときは、寺崎先生にまでか
かわっていただいて。

○寺崎 　　立教に調査役として戻ってき
たばかりでした。

○所 　　ああ、不採択というのは、文部省
でということね。

○青木 　　そう、不採択になっちゃった。

○所 　　分かりました。

○庄司 　　年表にわざわざ書くくらい
の出来事だった。

○所 　　そうですね。

○山本 　　当然、日本全国に対して全カリ
の取組みは十分に誇れるものだという
のが、全カリにかかわっている人をは
じめとして、立教全体の意識だったと僕
は思っているわけです。総長をはじめ、関
係する人々がしっかり準備をしてピア
リングに臨んだけれども結果は不採
択だったので。

　　ということは、これは全カリにかか
わる人にとって非常に大きかったのだけ
れど、同時に大学が全カリを見る目が
変わったのです。もう一気に変わった
と言っていいくらい。これは大きかった
です、本当に。

○青木 　　けがの功名。

○山本 だから、いや、僕の言っている「変わった」というのは、冷たくなった。全カリが円熟期みたいなものを迎えているというのは、一方で見れば、運営は放っておいても、誰かがやってくれる。つまり、個々の先生方がエネルギーを持ち込んできて、どんどんやらないと動かないという設立当初の組織ではもうないということです。立教に来られて日も浅い新しい先生までもがどんどん運営委員会に参加されて、そこにいればいいのだというような状況へと変化し、なおかつ対外的に見て、全カリは大したことはありませんよと言われているのと一緒ですよ、不採択というのは。

○庄司 あれは痛かったのですよ。

○山本 その次の年に今度は英語教育を中心に出して、まただめと言われた、ここが、たぶん全カリとしては一番つらかったころだと思います。

○庄司 でもね、あとで考えたら、私は身にしてみても分かったけど、難しすぎたのですよ、1回目の申請なんか特に。この全カリ全体をいきなりね、皆さんこうです、どうぞ分かってちょうだいという感じで持っていったけれども、分かりっこないですよ。だって、私たちがずっとやって、半年や一年、なかなか分からなかったのですから。それを、ああいう紙の資料でちょっと作って、それをプレゼン、ほんの短い時間やって、どうですなんて言ったって、分かっていただけない。

○所 読んでくれなかったんだ。

○庄司 理解不能だったのでしょうか。

○山本 理解不能というのは、よく当たっていると思いますよ。

○庄司 本当に理解不能だったと思います。

○寺崎 レポートを出せと言われたのに、修士論文を出しちゃったんですよ。

○庄司ほんと、ほんと。まず、ここにある全カリ運営センターのパンフレッ

トにある理念の図(39ページ参照)とか。一番理解されなかったのは、こちらの組織図(39ページ参照)なのですね。これなんかも、想像を超える組織なわけよ。もうそこだけで、すでにぐちゃぐちゃになっちゃったという感じでしたね、あのヒアリングのときは。ヒアリングが終わったとたん、これはもうだめだと思うくらい、理解されていなかったのですよ。驚いて、ショックを受けて帰ってきたのですね。だから、そのあと、2回目の英語でもうまくない結果が出たので、私は、正直言って相当に打ちのめされていたのですよね。

○所 でも、3回目に採択。

○庄司 今ではすごいですよ。この立教科目、GPのなかでの関心のもたれ方。あちこちから聞きますし、それからやはり学生も、すごく関心をもっています。こういうことになるということは、学生にもものすごい誇りを与えますね。立教はなにかすごい特別なことをやっているのだと初めて知るということもありません。

○山本 これも前々からの仕掛けが、2001年度からスタートしているのを、2005年度に出したわけです。裏話をすれば、全カリとしては、もう3回目はいいよね、1回やられて、2回やられて、もう。

○庄司 もう、あの世界は勝手にやってもらおうくらいに思いましたよね。あんなのを問題にして、われわれが落ち込んだら損だから、などと。

○寺崎 そうそう、むだだ。僕はもう全くひいていまし



庄司 洋子

た。

○山本 でも、当時の押見総長が、やはり教育、要するにこの特色GPになんとか、立教大学として取り組まないわけにはいかないと主張されて、立教科目でいくということになったわけですけども。それが、けがの功名というか。

○寺崎 今や、立教は特色GPと現代GPの総件数では、全国私立大学のなかでランキング第2位です。けっこう善戦している。

○所 それで、英語はまだ採択になっていないのですね。

○青木 そうですね。

○所 しかし、その立教科目、何で私が覚えていないのだろう。話はだいぶ前から。

○青木 そうですね、たぶん先生が部長でいらしたときに、もう大枠はかなりできていたと思います。

○庄司 まだ具体的に見えるような形になっていませんでしたよね。私が来たとき。

○青木 そうですね。全カリは、いろいろな意味での準備って、とにかくかなり先々やる。例えば2001年に実施するものというのは、むしろ1999年度のうちに、ある程度のめどが立っていないと、そもそも準備が間に合わない。結局、2001年度に実施するためには、2000年の5月にはだいたいのコマ数が決まり、だいたいどういう人に担当してもらうという大筋が見えないといけないうことは、実は2000年度になってから2001年度のことを考えていられないのです。2001年度のカリキュラムというのは、実は1999年のうちに考えているわけですから。だから、たぶん先生のお耳にも当然入れているし、部長会なんかには、おそらく先生に一番最初の大枠は言っていたのではないかと。ちょっと細かいところは調べていませんが。

○所 思い出しました。アイデアが印

象的で覚えています。

[兼任講師人事、ガイダンス、etc]

○庄司 やはりこういう総合科目のなかで影響を受けている学生が実際すごくいますね。私、必ずゼミの学生とかいろいろいな学生に、「全カリでは何を took の？」とか、そういうなかで「面白い科目あった？」って尋ねています。あったでしょうという態度はとらずに、「何かあった」というふうに聞くようにすると、けっこうあれがきっかけで、こういう勉強をする気になったとかね。「専門よりおもしろい全カリ科目がいろいろあった」と言う学生はけっこういるので、私はまた自信をもっちゃったわけです。一時めげていたのだけれども。特に、総合の展開って難しいですよ。学部の教員が出て、積極的にやってくれているかどうかというのも見えにくいし。それで、非常勤講師を選ぶときも相当小うるさく、やりましたもんね。

○山本 最初に運営委員会に出ていったときに、兼任人事で長い時間をかけるでしょう。学部なんか、そんなのは「いいですね」で終わりなのに。しかもさらに庄司先生が部長のときあたりから、もっときちんとやるというか。

○庄司 私のときは、はっきり言ってやりすぎたと思うくらいやりました。どうしてかという、やはり全学的に、全カリは誰にでもちょっと軽くやらせておけばいいと思う誤解をしている先生が、残念ながら少なくないのですよ。ですから、専門は無理だけれども、全カリ科目ならやらせてもいいのではないかなと思って、全く教育歴のない方を候補にしたり。でも、私は、教育で言ったら全カリほど難しいところはないと、ずっと主張していたのですよ。だって、全学年全学部の学生がいるところに、どうすれば魅力的な授業をできるのかというのは、私

たちだって頭を抱えるようなことでしよう。そういうことがあったので、ちょっと小うるさすぎるほどチェックして、悪いけどだめにした方もありましたからね。普通もう、あそこまで出してきていただいたらね、お断りするなんてことはまずないのですが。それから面接、非常勤の担当を時には面接までしてもらってましたから。

○山本 だから、今はそういう、全カリはそういうやり方なのだということが、かなり全学的には一応定着しています。教育歴がゼロという先生は、ほとんど出てこないのですよ。出てきても、どうしてこの先生でいいのだということをきっちり言ってもらおう。

○庄司 教育歴がない場合には説得力ある説明が書かれていないといけない。要するに、全カリを練習の場にしないでねというような、そういうことを徹底しましたよね。やりすぎちゃったかなと私は思ったのですけれども。

○所 いや、それぐらいやってもらわないと。なかなか徹底しない。

○山本 今いわゆる全カリの第二ステージとかいうことで、大きな改革をさらにという課題が突き付けられているのですけれども、全カリ側に立てば、それよりも何よりも、今のような話の流れで、やはり個々の授業の充実ということが取り組むべき課題だろうと僕はずっと思っていて、言語なんかは、そういう意味では非常に小さなクラスできちんとやろうと思えばできるという環境は整っている。ところが総合はそうではないというので、その一歩になるかどうかわかりませんが、今年は一応 Web 登録というのをかなり取り入れて、事前にとにかく登録してもらって、ある程度以上の人数は抽選ではじくということにした。次は、本当にそれでも大きなクラスになったら、それは2つに分けるとか3つに分けるとか、そういうことをし

て、上限を決めたクラスというのを常に運営して、そのなかで授業をきちんとやるということ、やらないといけないのではないかと。

○庄司 そういう意味では、この年表のなかで、Web 登録を導入して、大規模で悪い環境の授業をだんだんとやらないようにしていく努力というのはすごく大きいと思いますよね。

あと、細かいことも全カリでは相当丁寧に議論していて、ガイダンスを全学統一的にきちんとやっていこうというふうに、ある時期からなりましたよね。だから、ガイダンスをやる人のガイダンスというのをやったりね。やはりすごいですよ、これも。

○青木 各学部から、ガイダンスをやる委員を集めてガイダンスを。

○庄司 すごいですよ、だからね。そんな発想って、本当によく出てきたというくらい。それから、やはり履修相談室を全カリがやるとか、あと試験なんかは、もう入試よりも張りつめた期末試験、定期試験。もうやはり全学の統一的な取組みということで。今は全学とも、学部ごとの違いもなるべくそろえましょうという流れになったけど、全カリは、先にもう全学基準でやっていて、私もびっくりしましたから。全カリの試験担当をやってみたら、ぴりぴり。

○山本 全カリの試みから始まった履修チャートというものがありますね。

○庄司 そう。あれをやりましたね。

○所 どういうものですか。

○山本 履修の手続きが非常に複雑なものですから、もっとわかりやすくチャートを作ったらどうかと、庄司先生のご提案で。

○庄司 そういう細かい対応というのを、相当、全カリは積み上げてきて、やはりそういうことは、やってみて初めて支持されていますよね。

○青木 本来は、だからそれは別に全カ

り、教養教育だからということではなくて、大学教育って本来そういうものなのだけれども、専門学部は、いろいろな事情のなかで、必ずしも必要としなかったという部分もあるだろうし、取組みが遅れていたというようなことを、全カリがやはりやっている。

○庄司 全カリが先駆けて、スタンダードを作ってきている。

○青木 そうですよ。

○庄司 そういう面はすごくあると、私も感じましたね。

○山本 スクールバスもそうです。あと、運営委員が全員、履修届を自分で書いて、いかに複雑かという。

○庄司 そう、そこまでやって、私、相当嫌われたけど。怒っちゃう先生もさすがにいましたけど。「今の全カリ部長、何やらせているんだ、こんなことまでやらせられるのか」と言われたことがあるのですけれども。やはり学生がどんなふうに変えているかを、履修届を運営委員に書いてもらうのです。そうすると、分からないわけよ。どこからどう取ったらいいか。あなたの所属学部の基準に合わせて、履修計画を立ててくださいって。

○所 その基準がまた面倒だからね。

○山本 ルールに抵触しているような、「これ、だめだよ」という取り方をしている先生がいっぱいね。「これはだめだよ」と言っていたのだけど。

○青木 それはすごいですよね、やっぱり。

○寺崎 本当にやったのですか。

○庄司 相当過激に、いろいろなことを。

○寺崎 へえ。さすがです。

○青木 全カリって、そういう意味で、やはり巨大な運動なのですよ。

○所 まだ、いまだに運動体ですよ。

○青木 ええ、そういう意味で、やはり運動なのですよ。そのへんって、すごく。

○所 一時、不採択で冷たくなったということでしたが、またその後、回復。

○山本 そこはやっぱり、僕から言えば、全学の空気はちょっと冷たいでしょうね、まだまだ。ただ…。

○庄司 でもそれは、あの影響ではないでしょう。必ずしも。

○山本 ここ数年、教養教育に対する認知度、あるいは重要性の認識は、立教大学以外からも、立教大学のなかでもそして、全学的に見直されてきています。だから、各先生方の全カリに対する見方も、明らかに変わってきていますよね。

だから、各学部の教授会のなかでいろいろ議論したときに、全カリはどうだとか、全カリの視点から見たらどうだということが、しょっちゅう出てきますよね。

[再び囑託講師のこと]

○寺崎 ちょっとすみません、前のほうに戻っていいですか。囑託講師制度、これについて、所先生、あのころ先生、運営委員で、組織担当だった。

○所 ああそうか、最初の。まだ実施の前年度ですね。

○寺崎 それで、僕の記憶で言えば、全カリ実施の前年まで囑託講師制度が決まらない。1997年発足で、1996年の夏くらいまで、混乱し宙に浮いていたのですね。

○青木 6月くらいまで引っ張ってましたね、たしか。

○寺崎 たしか教職員組合との間でいろいろ問題が起きて、どうなるか分からなかったという時期です。ただ、それよりもちょっと早く、法学部の上村達男先生が助け船を出してくれたわけです。

○所 そう、思い出しました。

○寺崎 ええ、私もそもそも囑託講師は何をする教員かということを書いて、ふたりの合作のレポートを出しました。要するに、上村先生（当時の法学部選出運

営委員)のレポートで初めて、宙に浮いていた構想に助け船が来たのです。あれでほっとした記憶が僕はあります。

○庄司 やはり、有力な先生が本当に全カ리를サポートしてきたのですね。

○寺崎 あの山村先生の対応はすごかった。そのころ所先生、どういふふうに見ておられましたか、法学の方の人として、ああいう契約制度を。新しい職種でしょう。

○所 いやいや、法律屋の仕事の範囲では、ちょっと。

○寺崎 僕は、あれは本当にどうなるかと思っていましたね。

○山本 立教大学で任期の付いた教員制度としては、助手があったのだけでも、実は任用を厳しく適用するのではなく現実には継続していました。そこへ新たな職種の嘱託講師は最長5年で完全に契約終了する、こういった制度が本当に上手に回るのかという心配はしました。そのこのところを山村先生が条文をずっと書かれていて、これをきっちり読めば、これはまあだいじょうぶというのでスタートできたというのが、僕は印象にあります。

○寺崎 先生もあのときはいらっしやった。

○山本 僕は1996年からです。

○寺崎 ちょうどそのときに入られた。

○青木 最初のころは、これ、どういふ話かよく分からないみたいなのころがあつて。

○山本 言語部会だったので、そういう話が出るたびに、いろいろな先生が反対の立場でした。言語部会では非常に大勢がそうだったのです。

○庄司 こじれましたよね、感情が。

○山本 山村先生の文書以来、急に進むというのは、非常によく覚えていますよね。

○寺崎 ええ。あれは重大な文書でしたね。『全カ리의すべて』に載っています。

○山本 だから、今は本当にそれで上手に、上手にという言い方をしているのか、われわれが運営をしている嘱託講師の制度についてはいろいろな見方があるでしょうけれども。

○寺崎 アメリカの制度をあのころ調べて、Adjunct Teacher (任期付の、テニユアのない教員) というものに対する契約解除の問題とか、異議が出たときどうするかって、調べました。一連の適切な手続きが、もうできているのですね、アメリカでは。それも調べたりなんかして、最後まで非常にきつかった記憶があります。

○青木 due process of law とか、よく言っていましたよね。

○寺崎 そう。due process はどういふのかとか、やっていました。それで踏み込んだおかげで、僕は初代ランゲージセンター長をさせられることになりました。せつかく所先生に全カリ部長を譲って、ほっとしていたのに。

○所 ああ、そうですね。

○寺崎 だから最後まで縁は切れなかったの、慣れぬ英語を操ってあいさつをしたり何かしていた。

○青木 だから、全カリって本当に全学共通カリキュラムと言ってしまうから、どうしても、いわゆる科目のカリキュラムの部分が表に出るし、それは、結局は学生に還元するという意味でも、当然カリキュラムというのは大事なのだと思うのですけれども、でもやはり、それを支えている、そういう教員が協力するための仕掛けであるとか、そもそも勤務形



態から始まって、ものの決め方だとか、やはりありとあらゆる事が非常に、それこそ双方向的だなあという感じがします。

○所 それを抜いたのでは、やはり全カリの話にはならないですね。

○山本 ええ、ならない。

○青木 なので、あまりこの座談会でカリキュラムの具体的な話は、実はしていない。本当は、もうちょっとそういうところをちゃんとやらなければいけなかったのに、どうも、どちらかという皆さん運営センター部長でいらっしやっしたし、僕も裏方でそういうところにかかわったことも多かったので、どうしても運営の苦勞話みたいになってしまうけれども。

○所 いや、そのほうが記録としては大事ですね。そういう裏方の話が。

○青木 でも、これ内部の記録ではなくて、一応『大学教育研究フォーラム』に載せる。そこのところはあるのです。

○庄司 でも、カリキュラムは見ればある程度は分かるけれども、こういう経過というのは本当に分かりにくいですよ。

○山本 立ち上げて、運営して、問題を解決して。

○寺崎 あのころははっきり分かっていたことは、嘱託講師制度をとらなければ、何と言ったって、この言語教育は実現しない。それははっきり分かっていたのですね。でも、そこをどういうふうにreasoning（理屈づけ）していったらいいかが分からない。

○所 そうか、これが上村文書なんだ。

○寺崎 これが上村文書。

○山本 そういう意味で週2回のペアクラスが大きいですよ。ペアクラスを維持するには、嘱託講師を導入するしか方法がない。

○青木 やはり全カリは教育の現場につながっているところから起きているのですよね、すべての話は。だから結

局、何で旧来の、多くの大学で今でも行われているけれども、普通の外国語教育がうまくいかないか、一般教育における外国語教育がうまくいかないかが分かりますね。結局、人数のこともあるけれども、ひとりの先生がやってきて、週1回授業をやって、しかもあまりコントロールされていないので、その先生が好きな、例えば小説をテキストとして読んで、次の時間帯は全然違う人が違うテキストを読んでいるみたいなことをやっている。

それではだめだと。やはり一週間何コマか、コマ数はまだちょっといろいろ議論があるけれども、何コマか、とにかく全体としてこういうプログラムに基づいてやっていけば、全体として力がつくと考えた。そのためには、しかし学生をきちんと把握しなければいけない。そのためには、ひとりの先生が少なくとも週2回、同じクラスを持って、学生を個としても把握するというようなことをやらなければ、このプラン全体がうまくいかないのだという、それがやはり学生のためになるというようなことがある。

しかも、けっこう回転早く学生の実力とかが上がって、例えばクラス展開もしやすくするように、半年ごとに答を出して、やりましょうというので、さっき寺崎先生が言われた Semester 制の問題も出てくるわけだ。やはりペアクラスみたいなことを考えると、非常勤の兼任講師の先生だと、なかなか週2回来てくださいといっても、現実の問題として非常に難しいということになる。そこで、うちの大学に基本的には専念して下さる方が必要だというようなことで、やはり嘱託講師といった制度が必要なのだと。全部が現場にかかわる、学生を見ながら、これこれが必要だというふうに言っているので、そこのところはやはり強いですね。

○庄司 現実に2コマやる人を4人、5

人とお願ひするか、やはりおひとり8コマないし10コマやっていただくかという、その違いですから。

○寺崎 大違いですよ。

○庄司 全然違いますよね。

○寺崎 ひとつ自慢させてもらっていますか。「嘱託講師」という名を思いついた理由です。最初、準備委員会が出した全カリの大枠を記した「グリーンパンフ」での名称は契約教員だったのですね。どうも「パートの教員」というのに近い、これはだめだと思って、ずっと歴史を思い出していたのです。そうしたら、かつて帝国大学で、教授は講座を担当する。助教授は講座を担当することができるけれども、もらう給料は半分だと、こうなっていたのです。ただし、外国人しか担当できない講座があるのですね。これは外国人教師に頼むけれども、それを「嘱託講師」と称するとなっていたのです。それを思い出して、「それだ、あれがいい」と当時の言語部会長の実松克義先生に言ったら、もう大賛成して下さった。

○青木 初代言語部会長ですね。

○寺崎 初代言語部会長。契約教員なんてやめなさい。あれは東大紛争のときに、佐藤首相が言った言葉なんだよ、やめやめ、と。

[教育評価の問題]

○青木 さて、そろそろ次の話題に進みます。もうすでにちょっと話は出ていたのですが、例えば、全カリが特色GPに申請して、最初2回はだめで、最後3回目に立教科目で通ったみたいなのが合ったわけで、必ずしもGPだけではないのだけれども、やはりカリキュラムとしてやっている以上、それに対する評価という問題があって、いわゆる教育というようなものをどういうふうに評価するか。内部でもいろいろ点検したりする

し、というようなことを、少し寺崎先生、初代部長というお立場だけではないかもしれないけれども、言っていただければ。

○寺崎 特色GPは、もうさっき話に出たからいいでしょう。結局、最初に落ちた理由がだんだん分かってきたのですけれども、ペーパーレフェリーの点数は疑うべきもなくトップに近かったそうです。誰も、あれが落ちるとは思わなかった。ヒアリングのところで落とされたというのに近い。本当に、ひどい。

○庄司 そうでしたよね。思い出したくないくらい。

○寺崎 先生も覚えておられるでしょう。びっくりしました。質疑応答時間の過半が質問で、こっちの側がresponseするチャンスを与えられなかったのですよ。

第二回目の言語で申請したときは、「立教は、よくできる学生を連れてきてしゃべらせた、あれがいけない」という意見が出たというのです。これも、なぜか分からない。要するに、審査過程が現実に行われている場面、磁場と言いますかね、ここで理性的な判断の評価とはちょっと違う面が出ているのではないかと思います。皮肉なことに、僕が全然関係しなくなったらちゃんと通った。

○青木 ただ、評価の問題について言えば、そういう個々の評価には、やはり変な、かつての福田首相ではないけれども、天の声にもときどき変な声があるといったような部分って確かにあるので、一回一回のことに一喜一憂する必要はないのだけれども、ただ、僕はそのころは総長室にいて、具体的な申請準備の過程とか、あとの反省会とかを少し横で見ていて、やはり自分たちがやってきたことをどう客観化するかということについて、これは全カリだけではなくて、立教大学全体がやはり弱いという気がしました。だからそういう意味でも、全カリ

は、立教全学がかかえているいろいろな状況を、先進的に自覚して変えていく努力をしている部分だと思うのだけれども。

やはり立教大学全体が、自己点検とかでも、きちんと例えば数字に成果をどう残すかとか、どういうふうにきちんとリストアップしておいて、人にすぐ見えるような形で見せられるとかといったことが遅れている。立教って、実はやっていることは各部局、全カリを含めてすごくいいのだけれども、それをうまく客観的に示すことができないというところがある。全カリはある意味で非常に立教らしい組織なので、一生懸命頑張ってる、やっていることに一所懸命になっているのだけれども、それをどうやったら上手に、言葉はきついけれども、売っていけるかというようなことについては弱さがある。

○寺崎 一番弱かったのは授業評価が行われていなかったことだったのですね。それは困る、というので、今の大学教育開発・支援センターができて、授業評価は全カリから継続的にやる体制ができた。大きかったですよね。このセンターの設立は大きかったです。おそらく今後、認証機関による評価も、結局、よくなるのではないですか。全カリで去年なされた外部評価、これは、全カリでしたいとおっしゃったので、私も協力させていただいたのだけれども、僕はよかったですよ。来た人たちがすごく手だれの人たち、言うなれば。

○青木 ここにある報告書に載っていたやつですよ。

○寺崎 はい。このメンバーは大学教育学会で一緒にやっている方たちのなかの、屈指の理論家ですよ。目次にありますでしょう、関根秀和先生が大阪女学院大学の学長で、社会学のご専攻です。後藤邦夫先生が物理学で、桃山学院大学。田辺洋二先生は英語教育ですね。吉田文

先生がメディア教育開発センターで、教育社会学。足立さんはいま立教に勤務しています。当時ベネッセの『Between』の編集長だった。そして坪野谷さん。この評価は、中身がすごく充実しているし、レベルが高いと思います。

この方たちの評価のなかで共通に指摘されている問題のひとつが、リベラルアーツ教育のシーケンス、学習順序というものをどう付けていくかということです。全カリは自由に展開して、学年の枠に縛られず、いつ取ってもいいですね。他方、そういう学習にも順序というものがあるべきではないかという問題があって、現在の制度でいいのだろうかという話。これは共通している指摘です。

ただ、評価委員全員がやはり感心したのが、組織のあり方ですよ。よくこれだけの組織ができて、これだけは、みんな一言もない。

○青木 褒められるのだけれども、これは多分に教職員のある種の努力というか、やはり相当な努力によって支えているわけで。

○庄司 作ったけれど、誰もついてこなかったというのではなくて、やはり作って、ちゃんと続く組織なのだから、私はすごいと思ったのと、それから全カリ事務室にいろいろな大学が話を聞きに来るのですよね。だけど、聞いて、びっくりして帰ってしまう。参考にならないって。

○寺崎 そう、参考にならない。

○庄司 「やれない」って、はっきりその場で言って帰られるというところが、けっこうあった。

○青木 「いやあ、うちではできませんね」というのが、よく出るせりふなんです。

○寺崎 本当に、「ああ、とてもできません」と。今でもまだ全学出勤態勢って、あちこちの国立大学なんか言っていますからね。おとといまで、大学教育学会

の大会が金沢大学であったのですよ。全学出動態勢、久しぶりに消防署みたいな話を聞いたと思って、びっくりしました。

それともうひとつは、科目の並べ方から同じようにできると言うのです。でも先生方が本気にならないし、だいたいこういうふうな組織にならないと、みんな言いますね。

【発足から安定へ】

○青木 さて、そろそろ、残る課題に行きます。山本先生には、これからの全カリということで、この先どんな変化がといたったようなことを、今日の話も含めて、最後にちょっとうかがえたらなあと思いますけれども。

それでは、寺崎先生、所先生、庄司先生から、まず全カリに部長としてかかわられて、実は部長以外の形でも、相当程度長く皆さんかかわられたわけですが、かかわられて感じられたこと、それから、もう少し大きく、では、それが例えば日本における大学教育にとってどういう意味があるのかとかいった点でお感じになったことがあれば、それぞれ少しずつお話しいただいて。最後は山本さんにお渡して、今後のことにつないでしゃべってもらおうというなかなか難しい課題です。では、寺崎先生から少しずつ。

○寺崎 もうさんざん発言しましたので、短く言います。思い出すと、ちょうど全カリが発足したころから、特に経済界が初めて一般教育、教養教育が必要だと言い出したのは大きかった。オウム真理教の事件のちょっとあとで、あれで宗教に関する意識が高くなってきた。どうしたらよいか。それから、おそらく企業自身がバブルのころに偏差値だけを頼りにめっちゃくちゃに採った人材に対して、失望し始めたという時期だったと思うのです。産業界の方も困っていた。そのSOSの信号に、いわびたつと合う

ものを立教は始めてしまったという事実があると思いますね。だから、大きい環境の流れから言うと、さっきからお話に出ているように、今はさらに教養教育については社会的ニーズが高まっている。これはもう明らかなことです。いつまで続くかという問題はありますが、でも明らかなことだと思います。

立教にとっては全カリ発足という試みは、とてもよかったと思います。つまり、時流、時代のニーズというものを、思わず知らず先取りしてしまっているというところがあるのですね。この「思わず知らず」というところが、いかにも立教的なのです、僕に言わせると。立教のように、お酒にたとえると、ぼこぼこっと醸造の樽みたいないところがある大学はあまりないのですよ。ボトムアップで始まり、ボトムアップで動いていくでしょう。これはとても珍しいスタイルだと思いますね。全カリもそのひとつだったのではないのでしょうか。あのころのエネルギーとか、それ以後も続けられた不可視の未来に対する意識というのは、やはり伝統の所産ではないかなと思っていますのですけどもね。

○所 私、部長になる前に運営委員で、総合の方の担当をしておりました。先ほどの半期制ですよ、あれは言語の方の条件設定に大きな役割を果たしたという話が出ていて、あれは総合の方でも重要な意味をもっていたと思いますね。

○青木 半期。ああ、セメスターね。

○所 半期。あれで、科目のテーマ性が強くなって、言うなれば新書版みたいなイメージになったのだと思いますね。それで足軽になったし、次の立教科目とか時事科目への足がかりになっていったのだろうと、いま、あとのことを拝しながら考えていたのですが。

当時は、小委員会でその構想や総合Bの話をしたりしていました。ですから、私、部長としては、できあがって、お膳



所 一彦

に出てきたものを引き継いで、あとはそれをとにかく壊さないように守って、守りの態勢に入って、それで庄司先生に引き継いだと、こういう感じで、あまり積極的になんかをやったという記憶がないですね。

1つか2つ、そう2つほど、かなりはっきりしたイメージで覚えている。ひとつは、人権科目を新しく増やそうという話になりまして、そのときに、部長会での立場もあったのだと思いますが、運営委員会で、これはとにかく何を削って入れろ、ただ増やすのはだめだといって、僕は断固頑張ったのです。それは、ひとつには、やはり人権科目をどれだけ重要と考えるかという方向性の問題があるので、ここでただ増やすだけなら、なんてことはない。他と入れ替えるから示しがつくのだと言って頑張って、だいぶ嫌われましたけれども、それで結局なんとかなった。

もうひとつは、ある研究室の中でだいぶいろいろと文句が出て、リーダーも嫌気がさしてきたということがありましたね。僕は、ここでつぶしちゃったら、全カリ全体がつぶれるからだめだと直接伝えたことがありました。

○山本 何年ごろですか、それ？

○所 何年ごろだろう。僕は部長を3年間しかやっていないから。いつごろだろう。1999年の頃でしょうか。

○寺崎 なるほど。

○青木 たしか寺崎先生のときは、初代でいらしたので、部長が非常に実務的なところまで、本当に細かいところまで、変な言い方だけれども、手を出していたかかないと、どうにもならなかった。一応枠組みができたあとというのは、部会

長が実務的なところを相当見るようになっていて、逆に部長としては、ここは危ないというか、そういう、ある意味では難しい問題だけ残っている。

○寺崎 所先生のときは問題がローカルに起きたわけですね。私たちの時代はローカルの話はほとんどないですよ。

○青木 全面戦争です。

○所 話がなんか細かいところになってきたね。

○青木 でも、そこは大きいですよ。

○所 崩れかねないですからね。これをとにかく、穴を見つけてはふさぐというので。そういう時期だったなあと思いますけれども。それでとにかく3年間は守って、そのあと発展させたのは庄司先生。

【全カリは参加型の演劇】

○庄司 私は正直言って、もともと教養教育にすごく関心があるとか、そういうことではなく、なにか本当に分からずに学部から送り出されて、全カリの前身の準備委員会にかかわるようになって、しかも運営委員も2年間やったあと、一度学部に戻っていましたが、また送り出されて、みんなからは返り咲きとか言われて、それで思いのほか長く全カリにかかわることになったのです。

でも、その間ずっと、寺崎先生のご苦勞を、さっき申したように見ている、ああいう大変な仕事をそのあと引き受ける先生がおられるのだろうかとか気にしておりました。所先生がお引き受けになったと聞いたときは、正直言って、よくお受けになったと思って、無責任にほんとそう思っていたのです。まあ、本当にありがとうございますという感じでね。だから、私、自分が本当に部長をやるといことは、言われるまで爪の先ほども考えたことがなくて、本当に悩みましたね。

だけどやはり、あとで考えると、全カ

りというのは、最初は部長はもちろん先生方がこれまた大変だったけれども、私のときはさすがにもう違っていました。今、全カリ第2ステージと言っているのに、私は部長に就任してすぐの『ニューズレター』で、もう第3ステージに入りましたなんて書いちゃって、ちょっとどうしようと思っているのですけれども、そのくらいもう、ある程度形はできていたのです。しかも、事務局がもう本当に強力ですから、これははっきり言って、部長会の学部長の先生方はお気の毒という感じ。私たちは楽というくらいにね。

○所 それは大きいね。

○庄司 それがあったのですよ。それで私もなんとか務まっていたと。そのなかで、私はあまり大きな改革をうんぬんということは、自分自身が考える力もあまりなかったと思うし、むしろいろいろな発明品を作ってくださる青木先生以下、いろいろな方がおられました。ただ、ルーティンのなかで細かいところを見ていくと、やらなければいけないのではないかと思うことはものすごくあるということが分かって、さっきちょっと話題にしたように、ガイダンスもやらなきやとか、履修のチャートがないと学生はうるたえるだろうとか、細かいことをいろいろやって、それから兼任講師を厳密にちゃんと選ぼうとか、そういうことを通じて、逆に学部メッセージを伝えていこうとか、そういうことを相当意識してやったのです。

そういうすごく丁寧な、みんながいるいろんなことを、すごいエネルギーをかけてやっているのを見て、私はだんだん、どこか全カリって本当におもしろいと思うようになったのです。何と言うか、立教らしさをみんなで演じる壮大な舞台みたいな感じの、何と言うか参加型の演劇というのがあるじゃないですか。ああいうイメージ。

○青木 みんなが役者になっちゃう。

○庄司 そういう感じを本当にもつようになつて、これはすごいことだと思いましたね。

だから私は、全カリというのは壮大なFD機構だ、と言っていたのですけれども、私個人にとっても、やはり自分の立教教員としての成長のプロセスに、ものすごくびたつとはまっついて、全学的な視野でものを見るときか考えるということは、全カリにかかわらなかつたら、なかつたかもしれない。立教にはよく言われるいくつかの全学交流システムがあって、ひとつは入試でみんなシャッフルされていろいろな人と出会う。それから労働組合があるので、あそこで学部を越えた人と付き合う。でも、全カリほど他所の学部はそうなんだということを教えられる場というのはなかつたのです。だから、私はそういう意味では自分にとってもやはり成長の場所というふうに、本当におせじでなく、心からそう思っています。

それから最後に思ったのは、まさか山本先生にこんな大変な変動期にバトンをお渡ししたとは、そのときはあまり思っていなくて、大変だとは思うけど、私よりも実務能力もすごく高い方だし、というくらいに思っていたのですけれども、こうなってくると、やはり全カリ部長というものの意味が変わらないといけないのかなと、本当に思いました。相当、強大な力をもった、各学部の学部長よりもさらに強い力を持った全カリ部長が必要になっています。今までは、すくなくとも私のところまでは、全カリ部長というのは、学部長と事務部長の間くらいにいるんだみたいな感じが、やはり多くの人の認識のなかにあったのですよ。特に、誰から選出されているのでもなく、総長からお声をかけられたというような選ばれ方から言っても。それから、同じ教授会のメンバーみたいな意味の仲間がいまいませんからね。学部長のところ

に学部教授会があるというのとは全然違う。

今度、委員会の答申でも出たように、各学部からやはり1人ずつでも、そこに出てくる人というのは、やはり精鋭の、本当に学部長くらいの委員でないとね。その横断教授会を率いるには学長に並ぶ副学長クラスのといるくらいの、そういう全カリ部長がいないと、次のステップはもたないのではないかな。ちょっとこれは言い過ぎてしまって、こんなことを載せるかどうかは別として。

○青木 みんな、そう言いながらどんどんしゃべってる。

○庄司 言いたいことを言ってしまった。

○所 そう言われて思い出しました。たしかにね。でも、そうなる筋というのは、最初からあったね。部長会のなかでの重きをなす度合いというのは大きかったっけ。寺崎先生のときから。

○寺崎 大きかったですよ。

○庄司 先生はそうだった。私はそういうことを伝えられていましたから。所先生が、やはり全学を見る立場で常に発言しておられたからと。

○所 そうせざるをえないんだもんね。

○寺崎 むしろ、他の学部長から気を使われたという印象があります。全部、案件がこっちにかかわってくる。僕がなんとか言わないと進まないという部分があつて、なかなかよかったです。所先生は、就任されてから半年くらいたったころ、すごく顔色がよくなりました。

○青木 すごいね。全カリ部長になって、顔色がよくなった。

○所 法学部長になったときは、顔色が悪くなった。だから全カリ部長の話があると云ったら、家内がえらい怖がつて、「法学部長のときはひどかった。やめてくれ」って言っていたのですけれども。塚田総長に、「いや、あれとは立場が違う」。もうすでに全学を代表する結論が

出ていて、学部長の時のような部長会と教授会との板挟みで苦勞するというようなことはないと言われて、ちょっと返答に困って。

○寺崎 本当にそうですね。

○所 やはり、強いのですね。全学からの代表の議論を整理して発言するって、やはり強いのです。

○青木 だから、それを聞いて思うのですが、今はちょっと第2ステージで難しい議論になっているので、例外的なものだけれども、組織図上はもう、部長会メンバーのなかであれほど強い部長はいないですよ、本当に。組織図上そうなのです。だって、誰からも攻撃されないのだから。

○寺崎 そうなんです。

○青木 それで山本さんがいま、どれだけ苦勞しているかという話を最後にうかがって。

○寺崎 ちょっとひとつだけ付け加えてください。事務局の方たちの強さという点ですが、当時、僕は、他所の大学の人に一番うらやましがられたのは、やっていることがみんな非常に新しいでしょう、例えば、どうして体育実技をスポーツ実習にしたかとかいうふうなことから始まって、外国語の言語の履修の仕方、その他、嘱託講師とは何か、そのようないろいろな点について、いろいろな大学の人が電話をかけてきて、聞いてきたらしいのです。そうすると、出てきた職員の人たちがものすごくよく知っているというのです。先生がいなくても、本当に詳しく教えてくれるって。

○庄司 先生より知っている。

○寺崎 本当に何度も褒められましたね。あきれられました、むしろ。ずっとそれはいままでも続いている。

○青木 僕も含めて皆さんそうだと思うけれども、全カリの経験のすごく大きなところというのは、教職員が、俗な言葉で言えば、どうやって協働するかとい

うことを体験するところでしょう。これはたぶん全カ리를少しまじめにやった人間だったら、みんなそう思うと思いますね。そこは本当に僕もいい経験をさせてもらったと思うのだけれども。

[全カリ第2ステージ]

○青木 時間も迫っているので、では山本先生、ちょっと将来展望も含めて。

○山本 最初に立教における全カ리의位置づけについてですが、総長が替わるたびに、全カリはどうなるのだろうかという心配をみんなしてきました。ところが、総長はさすが総長で、全カリというのは立教大学のなかにおいて非常に重要なポジションを占めているということはすぐ分かる。結果として、いままでずっと、冷静に見て全カリに人も金もかけてきていると僕は思っています。人というのは、教員であると同時に、言われているように職員の人、これはもう本当です。しかもお金もかけている。というのは、例えばいろいろなコマであったり、いろいろなことで、やっぱりかけていると思うのですよ。結果的にそうなっている。それを引き出しているのが全カ리의力だろうと思っています。

今、全カリに問われていることは、今年度で10年目という全カリは、最初のエネルギーでどんどん新たな仕掛けなどを生み出していったというイメージがやはりあって、その後に行われている改良に改良を重ねてゆっくりゆっくり進むという以外に何かないのか、やはり次の何かを編み出してほしい、生み出してほしいということが、やはりこの第2ステージへのきっかけだと思うのですよね。

例えば、すごく分かりやすい例で言えば英語です。英語はずっと、1週間に4回やって、1年に8単位で、ぎゅっとやる。「それはいいよ」と。ところが、そ

れでその次どうするのだということがなかなか出てこない。その1週間に前期4回、後期も4回で1年間で8単位の中身が、ゆっくりゆっくり変わるけれども、最初、10年前には非常に革新的な考え方であったものが、今でもそうかという、たぶんそうではないでしょうと。

そうすると、そういうものに対する新たな取組みというのはないのかということ、たぶん問われているような気がするのですよね。それが、全カリ第2ステージの議論が始まるきっかけとなったのでしょうか。それは残念ながら全カリ側から大きく一歩踏み出しましょうというふうになかなか出なくて、上から、例えば単位数をどうするのだとか、全カリ全体をどうするのだとかいう問いかけのなかで全カリ第2ステージの議論が始まっているわけですね。

それが、だんだん形が見えてきた段階で、先ほど皆さんのお話に話題として出てきている極めて特異な運営組織が、これから先もそれでずっと行けるかどうか。これだけたくさんの学部ができて、多くの学部では学部を維持するための、最少の教員で学部を運営している。そこから、例えば運営委員を毎年2人お願いしますということが、これから先も可能なのだろうか、そういうこともわれわれとしては解決すべき問題として突き付けられているわけですね。だから、新たな運営形態というものを考えることが必要なのです。

そういうことをいろいろ考えていくと、先ほどから言われている、全カリ部長の立場というのは、やはり今までとは違うだろうと思うわけですね。

ひとこと言えば、総長の次とかいうふうな言い方もされているのですけれども、やはり全学をまとめる、しかも教養教育ですから、全学全体の共通のカリキュラムをまとめながら、全学に対してどうあるべきかということを考える、そ

うという立場の部長なので、これはなかなか、僕が言うのも変だけれども、やはりもうちょっとまともな、いわゆる大物をもってこないといけないという感じで、そういうふうに、議論としては、いや僕の



山本 博聖

考え方としては思うわけです。

そういうふうにきちんと詰めていくと、僕もずっとこの全カりに参加してから、全カりに育てられたという気はすごくしているわけなので、全カりの仕組みとか、全カりが何を目指しているのかとか、どうして全カりは特徴があるのかということなどは勉強して、自分としては理解しているつもりなのですけれども、そこから次へどういう、いわゆる教育の革新、そういう部分、あるいは運動体として何を全学的に発信できるかという、そういうところは非常に重いなあと思っているわけです。

さらに新たなエネルギーを生み出すか、あるいは注入するか、そういう旗振り役という意味で言えば、やはり全カリ部長というのは、すごく大きな役割を期待されているし、そういうポジションだろうと思うわけです。僕の場合はちょっと、部長会では全然違う役割を果たしているの。

○所 いまだに運動体なのでしょう。確かに運動体だということを実感されるようなエネルギーを持っていますか。

○山本 それはやはり、それを思わないことには、毎日たぶんやれないと思うのです。もうこれでいいんだと思うと、すうっと。

○所 そうだと思います。

○山本 もう明らかに、それはそうなの

で。

○庄司 だって、所属している人がいない組織なのですから。

○所 それはそうだけだね。

○山本 本当にそう思いますよ。まあ、自分としてはそう思いながらも、自分をはじめとして、周りがやはりきちんとしているからだと思いますよね。それでなんとかもっているという。

○所 チャプレン室委員会を思い出すのですよね。あれはどのくらいの期間だったかと思いますが、かなりの長いあいだ運動体であり続けたのですね。飯田チャプレンあたりが中心になって、合宿なんかして、えらい議論して。

○青木 委員会として合宿ですか。

○所 そうです、チャプレン室委員会。どのくらいで、合宿はやらなくなったんだっけなあ。とにかく、長い間、運動体であり続けるというのは、えらいことです。

○山本 動いているんだということを生全カりに参加されている先生方も、ある部分は感じてもらえて、そこで成長していかれる。具体的に言えば、われわれと一緒に専門委員お2人ずつと部会長お1人ずつ、執行部を構成していますが、そのなかで先生方は明らかに、全カリ、全学という視点からいろいろな物事を発想されたり、意見を言われたり。僕からこんなことを言うては失礼なのですが、明らかに成長しているということが見える。それは分かります。

○所 対立の契機というのが常になくちゃいけない。

○山本 楽なほうがいいことは、もう決まっています。

○所 そうなんですよね、ええ。

○山本 大きな問題を、もう、どんと突き付けられて。

○庄司 小さなことに見えても、例えば私なんか、総合が一番悩みというか、心配の種ですよね。言語は、言語の先生と

いうのがおられるけれども、総合というのは、もう裾野が全学部の教員。そういうなかで、去年私、すごくうれしかったのは、メルマガが来るようになったじゃないですか、総合の。

○山本 総合部会長の上田先生からね。

○庄司 ああいうことというのは、「ああ、やればやれるんだ」みたいな。

○青木 まあ、上田さんらしい切込みですよね。

○庄司 そうね。でも私は、あれうれしかったです。つまり、全教員に総合からメールが来るわけですよ。それで、今こういう状況ですと。

○青木 いま、こういうのを募集していますとか。

○庄司 ああいうのが来るというのは、すごいことなのです。私はやっぱりすごくうれしかったのに、出す方は、本当にもう遠慮がちにね、「こんなもらってびっくりなさる先生もおられるかもしれませぬ」なんて書いて送ってきて、なんか申し訳ないなあと思うような。ああいうのは、本当にすごいなあと思いますよ。やっぱり少しずつ着実に新しいことをちゃんと進めているから。だから運動体なんですよ、やっぱり。

○青木 さて、今日はこれくらいで終わりにしましょうか。どうもありがとうございました。

[2006年11月23日(木)]

池袋キャンパス12号館2階応接室にて]